

佳作

感動は残り続ける

鹿児島県鹿児島県立鹿児島中央高等学校二年 大内田 優奈

「岐阜県を研修で訪れて一番心に残ったものは何ですか。」

と、もしも聞かれたら、私は答えることができない。なぜなら、岐阜県には私が今まで知らなかっただけで、沢山の感動がそこにあったからだ。

今回、私は「第五十回鹿児島・岐阜青少年ふれあい事業」に参加した。両県が姉妹県盟約を結ぶきっかけとなった江戸時代に行われた宝暦治水。その総責任者である平田靱負が祀られている治水神社に私たちはまず訪れた。バスの中から見えた長良川は想像以上に大きく、これまでに大きい川は今までに見たことがなかった。バスを降りると、昼どきで暑いのに、関わらず涼しげな風が吹いていた。治水神社には、宝暦治水工事で亡くなった薩摩義士たちの名が刻まれた石碑が建立されていた。

その石碑を見ると少し心が痛くなったが、それ以上に、その方たちのおかげで、木曾三川の被害で悩む多くの住民が安全な暮らしができるようになったのだと考えると、

差し伸べられるような人になりたいと思った。

研修中に私が感動したことは無論、これだけではない。岐阜県の自然や文化、歴史は素晴らしかった。上から眺める白川郷の合掌造り集落は壮観だった。空は青くて山々の緑はきれいで空気は澄んでいて、山々に囲まれた合掌造り集落はまるで違う世界かのように感じた。息を呑むほどの美しさだった。そして実際に合掌造りを間近で見たときはその立派さに言葉を失った。かやぶき屋根はどっしりとしていて、屋根の角度は急で、全てが想像以上だった。和田家には、昔使われていた道具などが展示されていた。上の階には当時の様子の写真も展示されていて、実際に自分の立っているところで昔の人は働いていたのだと思うと不思議な気持ちになった。

私は長良川の水の透き通るようなきれいさも強く印象に残っている。鵜飼を観覧する際に乗った舟から見た川の水は川底の石一つ一つが見えるほどに透明だった。長良川のように大きな川の水がこれほどまでにきれいだとは思ってもいなかった。翌朝、友人と長良川公園に行った。長良川の水を手ですくい、その透明さを目で見て、水の冷たさを手のひらで感じ、湧き上がってきた感動をお互い伝えあった。川のほとりには心地よい風が吹いていて、川には小さな魚が泳いでいた。川の流れる音を聞きながら、私たちはしばらく感動を噛みしめていた。また、この研修でかけがえのない仲間とも出会えた。

心が温かくなった。お経を聞いた後、講話を聞いた。その講話では、治水工事の始まりから治水神社が建てられるまでのことを話してくださった。講話の中で一番印象に残ったのは、治水神社は地域の方々の寄付金によって建てられたということだった。さらには幕府によって薩摩義士たちにお礼を言うことさえためられた状況だったとのことだった。実は私は過去に道徳の授業で宝暦治水についての題材を学んだことがあった。しかしそのような話は読み物に載っていないなかった。もちろん、インターネットにも載っていない情報で私は今まで知らなかった。宝暦治水のことは一時期、人々の記憶から忘れられかけていたものの明治維新後、西田喜兵衛氏が治水工事のことを無かったことにしてはならないと、その事実を世間に知らせたそうだった。その結果、地域の方々によって治水神社が建てられた。講話を聞き終えたとき、私は胸がいっぱいになっていた。そして、治水工事がきっかけで今もなお繋がりに続けている両県の絆のことを考えると感動した。岐阜県の方々が薩摩義士たちにいつまでも感謝していると聞いて自分のことのように嬉しく思った。治水工事でたくさん犠牲があったが、それでも最後まで住民を救おうと頑張り続けた平田靱負を始めとした薩摩義士たちを鹿児島県民として、私はとても誇りに思った。そして彼らの深い人間愛に感銘を受けた私は、彼らのように見返りを求めず、困っている人に優しく手を

他愛も無い話をして、時には真面目な話もしながら仲間と交流をする時間がこの上なく楽しかった。私がこの研修に参加していなければ、出会うことのなかった人たちだった。そして、宝暦治水が行われていなかったとしたら両県が姉妹県盟約を結ぶことなんてなかっただろう。そうしたらこの研修自体無かった。二百五十年以上も前の出来事によって今の私たちの交流がある。それはどれだけすごいことなのだろう。姉妹県盟約が結ばれて以降、約五十年間毎年交流が繰り返されてきた。私は交流をして得た感動を、思いを、絆を、未来永劫、繋げていこうと心の底から思った。